

前回私たちは、船でローマに向かっていたパウロとその一行が、クレテ島のある港を出帆後に、激しい暴風に襲われ、地中海を漂うことになったのを見ました。それは実に、百人隊長ユリアスが、この時期の航海は危険だと訴えたパウロの忠告を退け、航海士や船長の意見に従ったからですが、その結果、彼らは14日間も地中海を漂うことになったわけです。けれども主は、そのような中で、御使いを通してパウロに語られ、彼を励まされました。

その時、主が語られたこと、それはパウロをして、彼が必ずカイザルの前に立つということ、そして、神様はパウロと同船している人々をみな、彼に与えられたということです。そのようにして語られたことを、パウロは必ずそのとおりになる、と信じたわけですが、それが今日の箇所でも部分的に成就します。つまり、44節の最後で「こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった」と書かれてある通り、パウロとともに船に乗っていた276人は、みな助かるのです。

ちなみに、この陸とはマルタという島のことですが、地図で確認しておきましょう！あと、ここにはアドリヤ海とありますが、当時は、地中海の真ん中を指してそう呼んだそうですが、現在では、イタリアとクロアチアの間をそう呼んでいます。マルタ島に上げられた後、パウロたちは約3ヶ月間そこに滞在し、それから再びローマに向けて航海を続けました。ですから、あえて言うまでもないですが、ここで「彼らが助かった」という時、それは地中海での二週間の漂流から、ということです。

そのことだけでも実にすばらしいニュースですが、ただ漂流してから14日目の夜に、彼らがどこかの陸地に近づいているとわかってから、実際に、マルタ島にたどり着くまでには、さらなる困難が彼らを待ち受けました。私のように航海に関して全くの素人の者は、この最初のところを読むと、あとは容易な過程を想像したくなると思うのです。ところが、現実はその簡単ではありませんでした。

29節「どこかで暗礁に乗り上げはしないかと心配して、ともから四つの錨を投げおろし、夜の明けるのを待った」。パウロたちを乗せた船は、276人を乗せるほどのものでしたから、決して小さくありませんでした。それゆえに、自分たちが陸に近づいていることがわかって、暗礁に乗り上げないために、夜が明けるのを待つ必要があったのです。そのどこに問題があったのか？と思われる方もおられると思います。

でも、どうぞイメージして見て下さい。彼らは、これまで二週間も荒れ狂う海の上を漂っていたのです。33節のパウロの言葉「きょうまで何も食わずに過ごして」からもわかるように、彼らは何も食べていませんでした。仮に食べていたとしても最低限であったはずです。つまり、限界がすぐそこまで来ていました。そういう中でさらに待つ、ということが容易なことだと思いますか？ここまで待ったんだから、もう少し待てるという理屈が通じるでしょうか？その間に、また暴風か何かに襲われることがないともいえなかったのです。

そのことを心に留めつつ、30節を見ます。「ところが、水夫たちは船から逃げ出そうとして、へさきから錨を降ろすように見せかけて、小舟を海に降ろしていたので…」そう、ここで船を操る大事な存在の水夫たちが、自分たちだけ逃げようとしたのです。「船だけならまだしも、人々を捨てて、自分たちだけ助かろうとするなんて、何と薄情な！」と言いたいところですが、それほど彼らも限界が来ていたのでしょう。でも彼らがいなくなると、困るのは残された人々です。水夫たちの行動に気づいたパウロは、百人隊長や兵士たちに言いました。31節「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたも助かりません」。

すでに見たように、このパウロのことばには、水夫たちがいなければ、船を操る者がいないので、彼らも助からない、という意味があります。また同時に、それによって「同船している人々をみな彼に与えた」という主の約束も成就されなくなるので、そうすれば、百人隊長や兵士たちの命もどうなるかわからない、といった意味が込められていたと思われます。いずれにせよ、このパウロのことばを聞いた兵士たちは、小舟の綱を断ち切ることで、水夫たちが逃げ出すのを防ぐことができたのです。

そして、夜明けが近いた頃、パウロは、みなに食事を取ることを勧めてこう言いました。 33-36 節「『あなたがたは待ちに待って、きょうまで何も食わずに過ごして、十四日になります。34 ですから、私はあなたがたに、食事をとることを勧めます。これであなたがたは助かることになるのです。あなたがたの頭から髪一筋も失われることはありません。』35 こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝をささげてから、それを裂いて食べ始めた。36 そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった」。

パウロをして、彼がこのように確信をもって語ったのは、陸に近づいているという事実を彼も知っていたからだと思いますが、それだけではないと思います。つまり、パウロは、主と主の約束のことばを信じるゆえに、主への信頼を込めて、このように語り、人々を力づけたのです。そして、そのことは、同船しているすべての者を元気づけました。というのも、パウロがこのように語り、パンを取り、神様に感謝をささげてからそれを食べ始めた後、「一同も元気づけられ、みなが食事をとった」と書かれてあるからです。もちろん、彼らは食事によって力を得ました。でもそれは、ただ食物によったのではなく、パウロを通して語られた主の約束のことばによったと言えるでしょう。

そのようにしていよいよ夜が明けると、それがどこの陸地かはわかりませんでした。砂浜のある入江が彼らの目に留まります。できれば、そこに船を乗り入れようとなり、彼らは錨を切って海に捨て、同時にかじ綱を解き、風に前の帆を上げて、その砂浜に向かって進んで行きました。どうぞその光景をイメージして下さい。この時みながどれだけ期待に胸を膨らませていたかを。ところが、あともう少しというところで、さらなる問題が彼らを襲います。41 節「ところが、潮流の流れ合う浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。へさはめり込んで動かなくなり、ともは激しい波に打たれて破れ始めた」。

何ということでしょう。船を座礁させてしまうこと、それは水夫たちが心配していたことです。それがゴールを目の前に起こってしまったのです。そして、それにより、船はダメになってしまいます。彼らに残されていた選択肢、それは泳いで陸まで行くことでした。ところが、それには大きな問題が含まれていたのです。42 節「兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと相談した」。なぜ兵士たちは、このように考えたのか？「いくら彼らが囚人だからといって、ここで殺さなくても…」と考える人もおられると思います。

どうぞ 16 章で見たピリピでの出来事を思い出して下さい。そこでパウロとシラスは、むちで打たれ、牢に入れられるという迫害を受けましたが、その時、大地震が起こり、囚人たちがみな逃げてしまったと思い込んだ看守が、どんな行動を取ろうとしたかを覚えておられますか？彼は自害しようとしたのです。なぜですか？看守にとって囚人を逃すということは、その囚人に課せられた罰を代わりに受けるか、または死刑を意味していたからです。実に大きな責任と言えますが、そのことは、牢に入れられていたペテロが、聖霊によって助けられたところからもわかります。彼の番をしていた兵士たちは、取り調べの後、処刑されたのです (12:19)。ですから、ここでの兵士たちも、そういった懸念から、囚人たちを殺す計画を立てたといえます。

当然、パウロもその中の一人として含まれていたわけですが、では、その殺害計画は実行されましたか？43-44 節「しかし百人隊長は、パウロをあくまでも助けようと思って、その計画を押さえ、泳げる者がまず海に飛び込んで陸に上がるように、44 それから残りの者は、板切れや、その他の、船にある物につかまって行くように命じた。こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった」。

なぜ百人隊長ユリアスは、パウロを助けようとしたのか？それは彼が、パウロの忠告を聞かなかったゆえに、このような災難に遭ったという責任を感じるころからですか？つまり、パウロに対する申し訳なさから、彼はパウロを助けようとしたのでしょうか？またこうも考えられると思います。パウロは、ユリアスを始め、人々が自分の忠告を聞かなかったことを確かに責めはしました。でも同時に、そこで神様の約束のことば、つまり、みなが救われるということも語ったのです。そして、そのことが今まさに現実となりつつある中で、ユリアスもまた、主のことばを信じたとも考えられます。「みなが助かるためには、たとえそれが囚人であったとしても、誰の命も失われてはいけない」と。

実際のところは、私にはわかりません。ただここで少なくともいえること、それはこのことも含めて、主は「あなたと同船している人々をみな、あなたに与えた」とパウロに語られた、ということです。つまり、パウロに好意的であった百人隊長ユリアスが、このようにして兵士たちの殺害計画を防いだのも、決して偶然（たまたま）ではなかったのです。これも偉大な主の御手とその救いのご計画の中にありました。パウロとしては、このことが予測できた。それゆえに、航海を続けることに強く反対したのです。でも彼には人々をコントロールする力はなく、その結果、彼自身も、このようなひどい目に巻き込まれてしまったのです。

それでも主は、ご自分が約束されたことを、そのとおりに実現へと導かれました。彼らは、一人も失うことなく、陸に上がることができたのです。もちろん、これですべてが成就したわけではありません。でも、このことがあってこそ、その後のローマ行きもあるわけです。私たちは、物事が自分のコントロールできる範囲を超えていると思う時、大きなストレスを感じます。イライラが募り、他者を責めたくなるのです。でも、この世にある限り、そのような苦しみや痛みは決して避けられないのです。

そのような中で、水夫たちは、自分だけが助かることを考え、逃げようとしていました。兵士たちは、自分の考えや力により頼むことで、自分の目に叶うことをしようとした、つまり、囚人たちを殺そうとしたのです。でも、ここでの主のみこころは、みなに船に留まること、つまり、みなに助かることだったのです。なぜなら、主は、パウロと同船している人々をみな、彼に与えておられたからです。それは必ずしも彼らすべての者の救いを意味しせん。でもそれは、この難船の経験を通して、またその中でパウロを通して主のことばが語られることで、彼らがみな、主と主のすばらしさを身をもって体験することを意味していたのです。

この世における私たちの歩みも、このパウロたちの航海のようだと思います。一見、シンプルに思えるようなことの中でも、悪魔の策略や人の自己中心、つまり、罪の問題ゆえに、ことが複雑になり、時に危険な目に遭うことさえあるのです。その中で、私たちはしばしば望みを失いそうになり、問題から逃げ出そうとしたり、自分の考えや力で何とか問題を解決しようとしたりします。でも現実には、なかなか願ったようには行かない。上手くいったと思ったら、次の瞬間、大きな試練に襲われるといった感じです。でも、そのただ中で、私たちの主は、私たちを励まし、力を与えて下さいます。主イエスこそ救い主だからです。

御使いを通して、パウロに語り、そのおことば通りに、みなを助けられた主は、今日もご自分に救いの望みを置き、ついて来る者に、みことばをもって語り、ご自分の霊（聖霊）をもって力づけて下さいます。私たちが主の助けなしには、望みのない者、罪ゆえに滅び行く者にすぎないことを主が知っておられるからです。ですから、主は、ご自分の方から来て下さいました。百人隊長や人々のように、ご自分の忠告に耳を貸さず、それぞれ自分の心の欲するところを追い求めるような自分勝手な私たちのために、主は、ご自分のいのちをその罪の代価として支払って下さったのです。そして、その身代わりの死、つまり、十字架の死と復活の力をもって、私たちを救って下さいました。今日も救い続け、やがての日にはその救いを完成して下さいます。私たちがいかなる時にも、この方とともに居続けるのはそのためです。この方が私たちを救い主だからです。

ヨハ 6:35-40 「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。36 しかし、あなたがたはわたしを見ながら信じようとしないと、わたしはあなたがたに言いました。37 父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。38 わたしが天から下って来たのは、自分のところを行くためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行くためです。39 わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。40 事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます」。